

大学新入生が経験してきた高等学校情報科の学びのスタイル：麗澤大学2025年度新入生を対象とした調査・続報

中園 長新^{1,a)}

概要：情報処理学会コンピュータと教育研究会が作成した「高等学校情報科での学びに関する調査アンケート実施項目」に基づき、麗澤大学2025年度新入生を対象としたアンケート調査を行った。本稿では、CE180で発表した調査報告に含められなかった、高等学校情報科における学びのスタイルに関する調査結果を分析・考察する。情報科の授業では、教師による知識伝達型の講義やコンピュータ実習は広く実践されている一方で、自分のペースで学習する活動やグループワーク等は比較的少なく、プレゼンテーション等に至っては半数以上の回答者が「ほとんどなかった」と回答した。演習を重視しつつ、受験教科としての立場も併せ持つ高等学校情報科の学びのスタイルについて、現状を確認するとともに今後の展望について検討を行う。

The Learning Style of High School Informatics Experienced by University Freshmen: A Follow-up Survey of the Freshmen of Reitaku University Academic Year 2025

NAGAYOSHI NAKAZONO^{1,a)}

1. はじめに

1.1 研究の背景

本研究は、高等学校学習指導要領改訂や大学入学共通テストへの「情報」追加といった制度的な変化が、高等学校での学びの実態にどのような影響を与えているか、あるいは与えていないかを明らかにすることを目指して実施した調査のうち、既発表論文で扱えなかった「学びのスタイル」に着目して分析・考察したものである。

2018（平成30）年改訂の高等学校学習指導要領[1]が2022（令和4）年度から学年進行実施され、この教育課程で学んだ最初の世代が、2025（令和7）年4月から大学に進学してきている。この学習指導要領改訂では、共通教科情報科の科目が必修科目「情報Ⅰ」と選択科目「情報Ⅱ」に再編され、原則としてすべての高校生が同じ情報教育を

受けることとなった。2025（令和7）年1月実施の大学入学共通テストからは、受験教科として「情報」が追加され、情報科は「受験教科」としての側面も併せ持つことになった[2]。

教育課程が変わると、学習者の学びの内容も変化し、その結果として学習者が身につける資質・能力も変化することが想定される。その一方で、いくら制度が変わっても教育実践の実態や学習者自身の態度等が変容せず、結果的に変化しないという可能性も十分に考えられよう。教育課程の変化によって学習者（ここでは高校生）がどのように変化したか、あるいはしなかったかについては、実態を調査することで明らかにしなければならない。本研究では、高等学校で学び卒業した後に大学に入学した新入生に調査を行うことで、実態を把握するアプローチをとる。

ところで、2018（平成30）年改訂の学習指導要領^{*1}では教育内容（いわゆる「何を学ぶか」）だけでなく、探究学

¹ 麗澤大学
Reitaku University,
2-1-1, Hikarigaoka, Kashiwa, Chiba 277-8686, Japan
^{a)} nnakazon@reitaku-u.ac.jp

^{*1} 2019（平成29）年改訂の小中学校学習指導要領も、同じ方向性が見て取れる。

習を重視するなど、教育方法（いわゆる「どのように学ぶか」）に関する改革も行なわれている [3]。教師による一方的な講義形式だけでなく、学習者自身が主体的に学んだり考えたりする「主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善）」[4] が強調され、学校では学びのあり方を見直す動きが加速している。

こうした流れの中で、高等学校情報科の学びもまた、主体的・対話的で深い学びを意識した実践がなされている可能性がある。情報科は演習・実習を多く含む教科であるため、学習指導要領改訂前も、講義以外の学びのスタイルが一定割合含まれていた [5]。今回の調査では、情報科における学びのスタイルがどのようになっているか実態を把握することで、主体的・対話的で深い学びが重視される状況において情報科がどのような学びを実践しているのかを明らかにするとともに、今後どのような学びのスタイルを意識していくことが求められるか検討していく。

1.2 研究の目的と意義

本研究の最終的なゴールは、2018（平成 30）年改訂の高等学校学習指導要領に基づく教育課程を履修してきた大学新入生を対象として、高等学校情報科での学びの実態を明らかにすることである。しかし、このゴールに到達するためには全国の多数の大学等における調査を実施する必要があるが、本稿筆者だけでは到達できない。そこで本稿ではこのゴールにたどり着くための研究の一つとして、筆者の本務校である麗澤大学の 2025 年度新入生を対象とした調査を実施し、その結果を整理し考察する。

本稿では特に、高等学校情報科での学びの実態のうち、学びのスタイルに着目する。情報科の授業においてどのようなスタイルの学びが実践されているのかを明らかにすることを通して、これからの情報教育における効果的・効率的な実践のあり方を検討するための知見を得ることを目指す。

本稿における研究成果は、前述した研究の最終的なゴールに到達するための成果の一つとして位置づけられる。また、本務校のような小規模私立大学における傾向を検討する上でも、重要なサンプルとなることが期待される。

1.3 既発表論文との関係

本研究は次章で詳説するように、麗澤大学におけるアンケート調査の分析を主としたものである。筆者はすでに、この調査の一部内容について分析し、研究発表会予稿（以下、既発表論文）として論文を発表している [6]。本稿は、既発表論文と同じアンケートの結果を調査・分析対象としているが、主たる分析対象の質問項目が異なっている。そのため本稿は、既発表論文の続報として位置づけ、既発表論文の結果を一部踏まえながら分析・考察等を行うことと

する。

なお、本稿では調査の方法をはじめ、既発表論文と共通する部分については、既発表論文を適宜引用しながら記述している。

2. アンケート調査

本章は、既発表論文 [6] の記述とおおむね同一である。ただし、一部の数値等は最新のものに更新した。

2.1 調査対象校の概要

アンケート調査は、筆者の本務校である麗澤大学の学生（2025 年度新入生）を対象に実施した。

麗澤大学は、千葉県柏市にキャンパスを持つ私立大学であり、外国語学部・国際学部・経済学部・経営学部・工学部の 5 学部からなる。学生数は小規模であり、入学生の定員は 700 名であるが、2025 年度（2025 年 7 月現在）は定員を超える 987 名^{*2}が 1 年次に在籍している。入学者選抜は、一般選抜に加えて、「年内入試」の推薦入試や総合型選抜等も実施しており [7]、近年は半数以上の学生が「年内入試」で合格し、入学している。

もともと外国語や経済の学部から始まったこともあり、いわゆる「文系」の色が濃い大学であったが、2024 年度に工学部を新設したことにより、小規模ながら文理融合型の総合大学となった。しかしながら教員としての印象では、いずれの学部もコンピュータ等に慣れ親しんでいる学生は少なく、情報・データサイエンス系の授業の中で基本的な内容から丁寧に解説する必要があることも多いと感じる。

卒業後はほとんどの学生が就職等を希望しており、大学院進学者は少数である。

本学新入生が情報教育にどのような意識を持っているかについては、本稿筆者が大学 ICT 推進協議会 2024 年度年次大会（AXIES2024）において発表した論文 [8] にまとめている。これは 2024 年度新入生に対する調査であり本稿調査とは対象が異なるが、参考として、次のような傾向が見出されている。

- 「情報」を、単なる ICT 活用に留まらず、意味理解やコミュニケーション等を含む広い概念としてとらえている
- 日頃から情報概念に触れており、情報というものについて考える機会が存在している
- 情報に関係する知識等に対して、自らすすんで知ろうとする意欲は高くない
- 高校情報科の学びに対して、パソコンスキル学習という意識が大きい

^{*2} 出典：麗澤大学「数字で見る麗澤大学」<https://www.reitaku-u.ac.jp/about/data/>（参照 2025-09-12）

2.2 調査の概要

本研究の目的を達成するため、アンケート調査を実施した。アンケート調査の項目は、情報処理学会 コンピュータと教育研究会 (CE 研) が作成した「高等学校情報科での学びに関する調査」アンケート項目 [9] を利用した。実際の調査実施にあたっては、アンケート項目を Google フォームに落とし込み、オンラインで回答できるようにした。

このアンケートは、大学における 2025 年度入学生を対象とすることを意図して作成されている。そのため本研究では、著者の本務校である麗澤大学（以下、必要に応じて本学と表記する）において、1 年次必修科目として設置されている科目「情報リテラシー A」の履修者を対象として調査することとした。当該科目は 1 年次の第 1 クォータ（春 semester の前半）に開講しており、100 分授業 14 回を週 2 回ずつ実施する。入学生全員が履修しており、学部ごとに複数のクラスに分割しているが、学修内容は共通化している。なお、必修科目であるため毎年度一定数の再履修者がいるが、再履修者は専用のクラスを用意しており、新入生クラスでの履修はない。そのため今回の調査では、再履修クラスを除くすべてのクラスを対象とした。これは本学の 2025 年度新入生を対象にしたことと同義である。

調査期間は 2025 年 4 月 16 日～29 日で、この期間に実施した当該科目の授業内で実施した。各クラスの授業担当教員が調査の概要や注意点を読み上げ、成績に影響しないことや任意回答であること等を伝えた上で受講生に回答してもらった。なお、回答に際しては名前やメールアドレス等の個人を特定する情報は一切収集していない^{*3}。

本調査は、麗澤大学「人を対象とする研究」に関する倫理細則に基づいて計画し、教員倫理委員会に届け出た上で実施した。

2.3 回答者の属性

アンケート調査は任意回答としたため、回答率は所属学部によってバラツキが生じた。学部ごとの授業履修者数とアンケート回答者数を表 1 に示す。なお、「分類」はアンケート結果を整理する際に用いる学問分野である^{*4}。全体としては 51.7% の回答率となった。学部ごとの回答率のバラツキが結果に与える影響については、本稿執筆時点では未検討であるため、今後の課題としたい。

なお、本調査は日本の高等学校における情報科での学びを対象としているため、海外の高等学校を卒業した学生に

^{*3} 調査対象者以外が回答することを防ぐため、Google フォームは大学アカウントでログインしたユーザのみがアクセスできる設定としたが、回答に際してメールアドレス（ログイン情報）の収集を行わない設定としたため、誰が回答したかどうかはわからないようになっている。

^{*4} 配布されているアンケート項目の記載に従い、学部を分類に対応させている。本稿においてこの分類は使用していないが、今後の研究で他大学等の調査結果と統合して分析する際に必要となるため、ここに記載した。

表 1 所属学部ごとのアンケート回答率

学部	分類	履修者数	回答者数	回答率
外国語学部	語学・言語学	287	234	81.5%
国際学部	国際	139	61	43.9%
経済学部	経済・経営・商学	197	125	63.5%
経営学部	経済・経営・商学	220	19	8.6%
工学部	工学	136	47	34.6%
不明（無回答）		-	20	-
計		979	506	51.7%

ついては調査対象外となる^{*5}。アンケート回答者のうち、[質問 1] で「海外の高等学校を卒業した」と回答した学生は 19 名であり、これらを除いた有効回答数は 487 件であった。本稿では以降、特記なき場合は有効回答数 487 件を母数として回答割合等を算出している。

また、調査対象者である 2025 年度入学生は、いわゆる現役生（2025 年 3 月卒業生）と浪人生が混在している。アンケート調査において高校卒業時期を質問したところ、「2025 年 3 月」との回答が 460 件（94.5%）、それより前に卒業した回答が 20 件（4.1%）、無回答 7 件（1.4%）であった。

3. 調査の結果

3.1 本稿における分析対象

アンケート調査項目のうち、大学入学共通テストの受験状況（質問 7）、情報科の履修状況（質問 8～12）、学習内容ごとの理解度（質問 13～16、18～21）、情報科全体に対する印象（質問 23）については既発表論文 [6] において分析・考察済である。本稿では、既発表論文において対象外とした、情報科における学びのスタイル（質問 22）を中心に分析を行う。また、既発表論文で分析した情報科全体に対する印象（質問 23）についても、質問 22 の回答との関連を見るため本稿でも取り上げる。

3.2 調査対象者のバックグラウンド（既発表論文の結果概要）

分析に先立ち、調査対象者（アンケート回答者）のバックグラウンドの傾向を確認する。なお、本項の内容は既発表論文 [6] で扱った調査結果の一部を、コンパクトに整理して再掲したものである。

回答者の令和 7 年度大学入学共通テスト受験状況は、「情報 I」受験者が 64 名（13.1%）、「旧情報」受験者が 3 名（0.6%）、受験していないのが 420 名（86.2%）であった。本学において、大学入学共通テストで「情報」を受験した者は約 1 割しかおらず、ほとんどの新入生が受験していないことが明らかになった。

高等学校における情報科の履修科目と履修時期について

^{*5} アンケート調査内の「[質問 1] あなたの出身高校の学校区分をお答えください。（単一回答）」で判定し、「海外の高等学校を卒業した」と回答した場合は以降の設定を省略して回答完了となるようにフォームを設定した。

は、「情報Ⅰ」履修者の6割以上に当たる310名が1年次に履修している。また、「情報Ⅱ」については7割近い回答者が履修しておらず、開講している高等学校が少ないことを示唆している。なお、いずれの科目についても、「履修したが、受けた時期を覚えていない」「履修したかどうか覚えていない」との回答が1~2割程度あった。これらの回答の真意は不明であるものの、情報科の学びについて科目名が意識されていない状況が推察される。

情報科の学習内容ごとの理解度としては、それぞれの学習内容に対して理解している回答者と理解していない回答者がおおむね半々といったところであるが、「アルゴリズムとプログラミング」「モデル化とシミュレーション」や「情報システムとデータの管理」「データの活用」に関してはネガティブな回答が6割を超えており、十分な理解に至っていない回答者が多いことが示された。逆に、ポジティブな回答が最も多かった「情報社会の問題解決」についても、4割を超える回答者がネガティブな回答をしており、情報科の学習内容は回答者にとって全体的に理解が困難なものであったことがうかがえる。

一方で、情報科を履修した感想としては、授業内容の楽しさ、興味、内容理解、難易度について、いずれの項目についてもポジティブな回答が半数以上を占めており、「授業内容は楽しかった」「授業内容の難易度は適切だった」についてはおよそ7割の回答者が「そう思う」または「ややそう思う」と回答した。

なお、理解度と感想については、大学入学共通テストにおける「情報Ⅰ」の受験の有無による影響も分析したが、本学における回答では情報入試の影響は見られなかった。ただし、本学の新生は「情報Ⅰ」受験者が非常に少なくサンプルサイズが不均衡になっているため、統計的に適切な分析であるかどうかは検討の余地がある。

3.3 情報科における学びのスタイル

本稿で分析するアンケート項目は「次のA~Eに示す授業スタイルについて、あなたが受けた教科「情報」の授業ではどのようにされていましたが。それぞれ当てはまるものを選択してください。」(質問22)である。この設問は下位の設問として次のA~Eが設定されており、いずれも「ほぼ毎回あった」「月に数回程度あった」「学期に数回程度あった」「ほとんどなかった」からの単一回答である。なお、本稿においては紙幅の都合により、括弧書きで示す略記で表記する場合がある。

- A. 黒板やスクリーンを用いた先生の説明 (教員説明)
- B. テキストや動画など教材を用いて自分のペースで学習していく活動 (自己ペース学習)
- C. ペアワークやグループワーク、話し合いや教え合い (グループ活動)

- D. コンピュータを用いた実習 (PC実習)
- E. プレゼンテーションや発表 (プレゼン)

これらの設問に対する回答結果を図1に示す。「黒板やスクリーンを用いた先生の説明」(78.9%)や「コンピュータを用いた実習」(86.0%)については、それぞれ8割近い回答者が月数回程度以上の実施があったと回答した。一方、「プレゼンテーションや発表」については、半数を超える53.8%の回答者が「ほとんどなかった」と回答した。「テキストや動画など教材を用いて自分のペースで学習していく活動」と「ペアワークやグループワーク、話し合いや教え合い」については月数回程度以上とそれ未満の回答がおおむね半数程度ずつであり、学校ごとのバラツキが推測される。

これらの学びのスタイルについて、スタイル同士の相関を確認した。ここではSpearmanの順位相関係数を算出した上で、多重比較の問題を考慮し、有意水準はBonferroni法を用いて補正した。この統計解析によって得られた相関行列を表2に示す。

学びのスタイル同士の相関係数は、グループ活動とプレゼンテーションの相関係数が0.360となって弱い相関がみられるが、それ以外の相関係数はいずれも0.3未満であった。

3.4 学びのスタイルと履修した感想の相関

既発表論文[6]では、情報科を履修した総合的な感想として、授業内容の楽しさ、興味、内容理解、難易度について質問した結果を分析している(質問23)。質問23は次に示すA~Dの下位質問に対し、「そう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の4件法でそれぞれ単一回答である。なお、本稿においては紙幅の都合により、括弧書きで示す略記で表記する場合がある。

- A. 授業内容は楽しかった (楽しかった)
- B. 授業内容に興味を持った (興味持った)
- C. 授業内容を理解できた (理解できた)
- D. 授業内容の難易度は適切だった (難易度適切)

この質問に対する回答を、既発表論文から再掲して図2に示す。

授業を履修した感想は、回答者がどのような授業を受けていたかという体験に基づくと考えられ、その体験はどのような学びのスタイルが授業で実践されていたかということに影響されると考えられる。そこで本稿では、前項で示した質問22の回答結果(学びのスタイル)と、既発表論文で分析した質問23の回答結果(情報科を履修した感想)の相関について確認する。

質問22(下位質問A~E)の回答結果と、質問23(下位質問A~D)それぞれの回答結果についてクロス相関分析

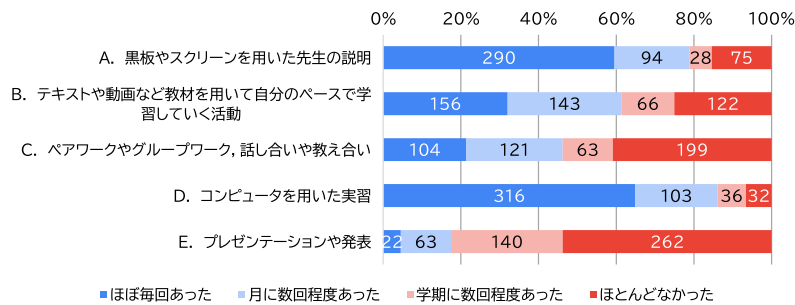


図 1 情報科における学びのスタイル

表 2 学びのスタイル同士の相関行列

	A. 教員説明	B. 自己ペース学習	C. グループ活動	D. PC 実習	E. プレゼン
A. 教員説明	-				
B. 自己ペース学習	.198***	-			
C. グループ活動	.247***	.248***	-		
D. PC 実習	.216***	.229***	.199***	-	
E. プレゼン	.162**	.201***	.360***	.122	-

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

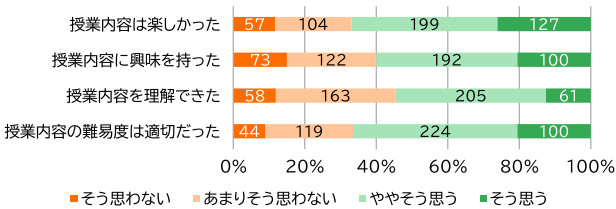


図 2 情報科を履修した感想（既発表論文 [6] からの再掲）

を行った．ここでは Spearman の順位相関係数を算出した上で、多重比較の問題を考慮し、有意水準は Bonferroni 法を用いて補正した．この統計解析によって得られた相関行列を表 3 に示す．

質問 22（学びのスタイル）のそれぞれについて、質問 23（履修した感想）との相関を確認すると、いずれの相関係数も小さく、0.3 未満であった．なお、質問 22 の下位質問 A（教員説明）については、質問 23 のいずれの下位質問とも有意差がみられなかった．

4. 考察

4.1 情報科の学びのスタイルにみられる傾向

本調査の結果から、情報科の学びのスタイルにおいては、いくつかの傾向が読み取れる．

黒板やスクリーンを用いた先生の説明（教員説明）については 59.5% の回答者が「ほぼ毎回あった」と回答しており、情報科においては旧来からの講義形式による、教え込みの授業が多く行われていることが示唆された．一方で、21.1% の回答者はそのようなスタイルが学期に数回程度もしくはそれ以下の頻度であったと回答しており、講義形式からの脱却を企図した実践も行っており数行われているものと

推察される*6．

テキストや動画など教材を用いて自分のペースで学習していく活動（自己ペース学習）についても、月に数回程度以上あったとする回答が 61.4% を占めている．具体的な実践内容はアンケート結果からは読み取れないが、学習者自身が自分のペースで学ぶことと情報科の学習は親和性が高いことが期待される結果といえよう．

その一方で、ペアワークやグループワーク、話し合いや教え合い（グループ活動）を月に数回程度以上あったとする回答は、46.2% まで減少する．自己ペース学習は実践されているものの、その学習成果が共有される機会はあまり多くないことが考えられる．グループ活動がほとんどなかったとする回答は 4 割を超えており（40.9%）、情報科の学びのスタイルとしてグループ活動の実践事例は少ないことが読み取れる．

コンピュータを用いた実習（PC 実習）については、86.0% の回答者が月に数回程度以上あったと回答している．情報科の学び（情報活用能力の育成）で扱う「情報」は、コンピュータ等の ICT に限ったものではなく、幅広いメディアを活用してさまざまな「情報」を扱うべきである．しかし、情報化が高度に進展した現代において、情報科の学びのツールとしてコンピュータの占める割合は非常に高いのは必然のことと考えられる．

学びのスタイルの中で、もっとも実践が少ないのがプレゼンテーションや発表（プレゼン）である．月に数回程度以上あったとする回答は 17.5% にとどまり、半数以上（53.8%）の回答者がほとんどなかったと回答している．なお、情報科の必修科目である「情報 I」には、コミュニ

*6 ただし、具体的にどのような授業実践が行われたのかについては、本調査からはうかがい知ることができない．

表 3 学びのスタイルと履修した感想の相関行列（クロス相関分析）

	A. 楽しかった	B. 興味持った	C. 理解できた	D. 難易度適切
A. 教員説明	.093	.044	.043	.085
B. 自己ペース学習	.151*	.163**	.180**	.157*
C. グループ活動	.267***	.273***	.259***	.181**
D. PC 実習	.275***	.215***	.133	.142*
E. プレゼン	.236***	.256***	.244***	.123

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

ケーションを扱う学習内容が含まれており、プレゼンテーションが必須というわけではないものの、何らかの形で情報を活用したコミュニケーションを扱う必要があり、プレゼンテーションを実践する下地は整っていると考えられる。そうした状況でプレゼンテーションの実施が少ないという現状は、情報科の学びのスタイルを見直しあるいは改善する余地があることの証左とも捉えることができる。

学びのスタイルの組み合わせとしては、有意な傾向はほとんど見出されなかった。グループ活動とプレゼンテーションに関してのみ相関係数が 0.3 を越えており、この 2 つのスタイルは同じ教員が実践することが一定数あるようである。ただし、これらについても相関係数は 0.360 にとどまっており、強い相関があるわけではない。

学びのスタイル全体の傾向を俯瞰すると、「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業実践は、現段階ではまだ十分ではないという現状が推察できる。もちろん、「主体的・対話的で深い学び」は教育方法ではなく学びの総体的な姿である^{*7}から、学びのスタイルだけをもってその是非を判断することはできない。本調査の結果はあくまでも、教育方法（学びのスタイル）という一面を切り取った状態から問題提起するものであり、情報科の実践と主体的・対話的で深い学びの関係については、より多面的な視点で考察が必要であろう。この点については本研究で扱っている調査の範疇を超えるため、今後の課題としたい。

4.2 学びのスタイルと履修した感想の関係性

本稿では、学びのスタイルと情報科を履修した感想について、どのような相関があるのかを分析した。分析の結果、いずれの組み合わせにおいても相関関係は見出せなかった。他の結果と比較して若干ながら高い数値となったものを非常に弱い相関^{*8}として無理矢理考察するのであれば、グループ活動や PC 実習あるいはプレゼンテーションといった学びのスタイルを行うと、情報科を履修した感想として楽しかった、興味を持ったという感想が多くなるようであるが、統計的には明言できない。

^{*7} 例として極論を言えば、教育方法が教員の一方的な講義であっても、その中で学習者が主体性を持って対話的に深く学ぶことができるのであれば、それは「主体的・対話的で深い学び」が実現されているといえる。

^{*8} 一般的に、このような相関係数の値（0.200～0.270 程度）では相関があるとは言わない。

なお、これら 3 つの学びのスタイルのうち、グループ活動とプレゼンテーションについては理解度の向上にもわずかながら寄与している可能性がある一方で、PC 実習についてはその傾向が見られなかった。コンピュータを使った実習は、学習者に楽しさや興味深さを与える一方で、必ずしも理解を向上させるとはいえないという主張が考えられるが、本調査の結果および分析だけでは統計的に十分な裏付けがなく、推測の域を出ない。

本稿の分析からは、学びのスタイルが情報科の授業の楽しさ、興味深さ、理解度、難易度に対してほとんど影響を与えないことが導かれる。何らかの学びのスタイルを採用したからといって、そのことが情報科の履修の体験を左右するものではないといえる。

この結果をどのように受け止めればよいか、非常に難しさを感じる。多くの教員はより良い授業を実践するため、さまざまな角度から授業研究を行い、改善をしている。授業研究・改善の中では教育方法についても取り上げることが多いはずで、それは学びのスタイルを検討・改善することにつながると考えられるが、そのことが直ちに学習者の体験を左右するものではないというのは、一般的な教育学の視点からすれば奇妙ともいえる。一つの可能性としては、学びのスタイル“だけ”が履修体験を左右するのではなく、その他の要因と複合的に影響し合った結果として履修体験が変容するという仮説が考えられる。本研究ではこれ以上の分析をすることが難しいが、今後の課題としてさらなる分析を検討したい。

5. おわりに

本研究では、情報処理学会コンピュータと教育研究会が作成した「高等学校情報科での学びに関する調査アンケート実施項目」に基づき、麗澤大学 2025 年度新入生を対象としたアンケート調査を行った。本稿では既発表論文に含められなかった、高等学校情報科における学びのスタイルに関する調査結果を分析・考察した。情報科の授業では、教師による知識伝達型の講義やコンピュータ実習は広く実践されている一方で、自分のペースで学習する活動やグループワーク等は比較的少なく、プレゼンテーション等に至っては半数以上の回答者が「ほとんどなかった」と回答した。また、学びのスタイルと情報科履修の感想についての相関

も分析したが、これらの間に相関は見られなかった。

大学入学共通テストにおける受験教科となった情報科は、単なる演習教科としてではなく、受験対策が必要な教科として位置づけられていくことが考えられる。しかし、受験対策一辺倒の授業になってしまうと、情報科が持つ学びの楽しさや有用さに意識が向かなくなり、ただテストで点を取ればよいという学びに矮小化されかねない。情報科に限らず、大学入学共通テストは学習指導要領や検定教科書に準拠して出題されるのだから、教科書に沿う形で学習指導要領の内容をしっかりと授業で扱い、その内容を学習者が理解していれば、自ずと受験対策になるはずである。そう考えれば、学びのスタイルを工夫して学習者の理解を促すことが、最大の受験対策（あるいは受験対応）となるのではないだろうか。

その一方で、本稿における分析・考察では、学びのスタイルを変えるだけでは学習者の学びに対する意識は変容しないことが示唆された。情報科の授業においては、学びのスタイルに工夫を凝らしつつ、それ以外の学びの要素についても同様に検討していく必要があるだろう。「それ以外」がどのようなものを指すのかについては、引き続き検討していきたい。

なお、本稿における調査は、筆者の本務校である麗澤大学の2025年度新入生のみを対象としている。当然ながら、本調査結果は大学の特性等のバイアスを受けており、本稿における考察を直ちに一般化することはできない。本調査の元となったアンケート調査項目は公開されており、すでに複数の大学で実施され、いくつかの報告が公開されている（[10], [11] 等）。今後は様々な大学等で実施された調査結果を統合して横断的に分析し、現行学習指導要領における学習者が、情報科でどのような学びを行い、何を得たのかについて一般的な傾向を見出したり、あるいは特徴ごとに分類したりしていくことが求められる。また、2025年度新入生だけでなく、次年度以降も同様の調査を継続的に実施し、経年変化も調査する必要がある。今後は本学でのより詳細な調査を実施するとともに、同様の調査を実施している大学等と連携し、調査ならびに研究を発展させていく予定である。

謝辞 調査にご協力いただきました、麗澤大学「情報リテラシー A」担当教員ならびに受講生のみなさまに感謝いたします。本研究の調査は、情報処理学会 コンピュータと教育研究会が作成したアンケート項目を使用して実施しました。 <https://ce.eplang.jp/index.php?InformaticsSurvey>

本研究は、JSPS 科研費 JP21K02864 ならびに 25K06475 の助成を受けたものです。

参考文献

- [1] 文部科学省：高等学校学習指導要領（平成 30 年告示），東山書房（2018 [出版 2019]）。
- [2] 大学入試センター：平成 30 年告示高等学校学習指導要領に対応した令和 7 年度大学入学共通テストからの出題教科・科目について，独立行政法人大学入試センター（オンライン），入手先 <https://www.dnc.ac.jp/albums/abm.php?d=510&f=abm00000301.pdf>（参照 2025-09-12）。
- [3] 文部科学省：学習指導要領改訂の考え方，文部科学省（オンライン），入手先 <https://www.mext.go.jp/content/1421692.6.pdf>（参照 2025-09-12）。
- [4] 文部科学省：主体的・対話的で深い学びの実現（「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善）について（イメージ），文部科学省（オンライン），入手先 <https://www.mext.go.jp/content/1421692.8.pdf>（参照 2025-09-12）。
- [5] 文部科学省：生涯学習施策に関する調査研究（高等学校情報科担当教員の現況等に関する調査研究），文部科学省（オンライン），入手先 https://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/chousa/_icsFiles/afieldfile/2018/10/24/1405408.5.pdf（参照 2025-09-12）。
- [6] 中園長新：高等学校情報科での学びに関する調査結果と考察：麗澤大学 2025 年度新入生を対象とした調査，情報処理学会研究報告 コンピュータと教育（CE），Vol. 2025-CE-180, No. 9, pp. 1–10（2025）。
- [7] 麗澤大学：麗澤大学年報 2024，麗澤大学（2025）。
- [8] 中園長新：ICT 活用と情報教育に対する大学新入生の意識と実態，大学 ICT 推進協議会 2024 年度年次大会論文集，pp. 63–70（2024）。
- [9] 情報処理学会 コンピュータと教育研究会：高等学校情報科での学びに関する調査アンケート実施項目の提供について，情報処理学会 コンピュータと教育研究会（オンライン），入手先 <https://ce.eplang.jp/index.php?InformaticsSurvey>（参照 2025-09-12）。
- [10] 杉嶋茜里，陳 品聿，内田奈津子：2025 年度大学入学共通テスト「情報 I」における高等学校情報科の学びの関係：教育学部におけるアンケート調査報告，情報処理学会研究報告 コンピュータと教育（CE），Vol. 2025-CE-180, No. 7, pp. 1–13（2025）。
- [11] 内田奈津子：2025 年度大学入学共通テスト「情報 I」の受験経験と高等学校情報科の学びに関する調査（速報），情報処理学会研究報告 コンピュータと教育（CE），Vol. 2025-CE-180, No. 8, pp. 1–9（2025）。

付 録

A.1 本稿で分析対象としたアンケート項目

本研究で実施したアンケート調査項目のうち、本稿で分析対象とした項目（質問 22・23）は次の通りである。

これらの項目は、情報処理学会 コンピュータと教育研究会が作成した「高等学校情報科での学びに関する調査アンケート実施項目」[9] から抜粋・引用したものである。

[質問 22]
次の A～E に示す授業スタイルについて、あなたが受けた

教科「情報」の授業ではどのようにされていましたか。それぞれ当てはまるものを選択してください。(単一回答)

A. 黒板やスクリーンを用いた先生の説明

- 4 = ほぼ毎回あった
3 = 月に数回程度あった
2 = 学期に数回程度あった
1 = ほとんどなかった

B. テキストや動画など教材を用いて自分のペースで学習していく活動

- 4 = ほぼ毎回あった
3 = 月に数回程度あった
2 = 学期に数回程度あった
1 = ほとんどなかった

C. ペアワークやグループワーク, 話し合いや教え合い

- 4 = ほぼ毎回あった
3 = 月に数回程度あった
2 = 学期に数回程度あった
1 = ほとんどなかった

D. コンピュータを用いた実習

- 4 = ほぼ毎回あった
3 = 月に数回程度あった
2 = 学期に数回程度あった
1 = ほとんどなかった

E. プレゼンテーションや発表

- 4 = ほぼ毎回あった
3 = 月に数回程度あった
2 = 学期に数回程度あった
1 = ほとんどなかった

[質問 23]

次の A~D について, 教科「情報」を受けた総合的な感想について, それぞれ当てはまるものを選択してください。(単一回答)

A. 授業内容は楽しかった

- 4 = そう思う
3 = ややそう思う
2 = あまりそう思わない
1 = そう思わない

B. 授業内容に興味を持った

- 4 = そう思う

3 = ややそう思う

2 = あまりそう思わない

1 = そう思わない

C. 授業内容を理解できた

- 4 = そう思う
3 = ややそう思う
2 = あまりそう思わない
1 = そう思わない

D. 授業内容の難易度は適切だった

- 4 = そう思う
3 = ややそう思う
2 = あまりそう思わない
1 = そう思わない